

説教 『 父たちの心を子どもたちに向けさせるために 』

小河信一 牧師

ルカによる福音書 1章5節～25節

⁵ ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。⁶ 二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。⁷ しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子どもがなく、二人とも既に年をとっていた。

⁸ さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、⁹ 祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。¹⁰ 香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。¹¹ すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。¹² ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。¹³ 天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。¹⁴ その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。¹⁵ 彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、¹⁶ イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。¹⁷ 彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」¹⁸ そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」¹⁹ 天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。²⁰ あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

²¹ 民衆はザカリアを待っていた。そして、彼が聖所で手間取るのを、不思議に思っていた。²² ザカリアはやっと出て来たけれども、話すことができなかった。そこで、人々は彼が聖所で幻を見たのだと悟った。ザカリアは身振りで示すだけで、口が利けないままだった。²³ やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。²⁴ その後、妻エリサベトは身ごもって、五か月の間身を隠していた。そして、こう言った。²⁵ 「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました。」

初めに本日の旧約と新約の聖書個所の共通点を明確にしましょう。それによって、父マノアか

ら父ザカリアへ、長子サムソンから長子ヨハネへという神の救いの歴史の流れを捉えましょう。

士師記13:1-24とルカ福音書1:5-25――

〈旧約〉 マノア―妻（名不詳）と 〈新約〉 ザカリア―エリサベト

- 妻の不妊

……士師記13:2 / ルカ1:7

- 礼拝の場面

……献げ物 祭壇 士師記13:19,20,23

主の聖所 香・香壇 ルカ1:9,10

- 父となる男（夫）に介入する主の天使。将来、子を持つ男性へのとりなし

……士師記13:10-18,21 / ルカ1:11-20

- 「父たちの心を子どもたちに向けさせるために」というモチーフ

……士師記13:8,12 参照：マラキ書3:24 / ルカ1:17

- 神にささげられた長子。聖別されたナジル人としての生涯

……士師記13:5,14 / ルカ1:15

さらに大きな枠組において、初めの約束〈旧約〉アブラハム―サラ → 〈旧約〉マノア―妻 → 〈新約〉ザカリア―エリサベト → 終わりの成就〈新約〉ヨセフ―マリアという展開が汲み取られるでしょう。繰り返し、或る夫婦が神に召され神に仕えるという遠大な神の歴史の中で、最後には、キリスト誕生へと至ることが分かります。

このように二つの出来事の特徴や類似点を列挙するならば、私たちは、これらの出来事が神の壮大な救いの歴史の一部であったと悟ることができるでしょう。確かに、マノア夫婦とザカリア夫婦の長子誕生の物語・双方は、初めの約束〈旧約〉アブラハム―サラの長子イサク（創世記12章―18章、21章）にさかのぼり、そして終わりの成就〈新約〉ヨセフ―マリアの「独り子」イエスへと至る神の綿密な計画の一環なのです。

アブラハムが主なる神にイサクをささげた時に、主が彼に約束された言葉「あなたを豊かに祝

福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう」（創世記22:17）の通り、神に属する子どもたちの誕生物語は、初めから終わりまで、つながりつつ広がっていきます。そのひと筋の希望は、風前の^{ふうぜん}ともしびのようにかき消されそうになりながらも（イザヤ書42:3）、明るい星の導きのもとに、最後には「主の栄光」となって地に^{あまね}周く輝きわたりました（マタイ2:9-10、ルカ2:9）。ここで、ただ漠然と神の子ら（信仰者）が増し加えられていくというのではありません。そこには、一連の子どもたちの聖なる誕生物語があり、それらが天からの栄光を伝えるひと筋の希望として輝き続けているということが大切なのです。

そこでまず、「太陽」に由来する名前を持つサムソンとその両親にまるわる「不思議」に焦点を合わせることにしましょう。

士師記13:18-19――

18 主の御使いは、「なぜわたしの名を尋ねるのか。それは不思議と言う」と答えた。

19 マノアは子山羊と穀物の献げ物を携え、岩の上に上って主、不思議なことをなされる方にささげようとした。マノアとその妻は見ていた。

主の御使いが最初にマノアの妻に現れ、「身ごもって、男の子を産むであろう」（士師記13:3）と告げました。妻からその旨を伝えられたマノアは、自らも神の人に会いたいと、主に祈りました。その祈りが聞かれて、マノアと主の御使いが対話したのが、上に引用した場面です。

主の御使いの名は「不思議」である、さらには、主なる神、その方こそが「不思議なことをなされる」ということが明らかにされました。

主なる神は実際に、これから生まれてくる、マノアの長子サムソンを通して、次々と「不思議なこと」を実行されました。サムソンは聖別された者として、彼自身が「不思議」という名の天使のごとく「不可解で底知れない行動」（D.グロスマン）を引き起こしました。

サムソンが、ペリシテ人の領地に飛び込んで行って無頼漢（ならずもの）ぶりを発揮したこと、また、ペリシテ人の娘や遊女を深く愛したことなど、まさにマノアとその妻、両親の目には「不思議」と映ったことでしょう。

士師記13:19「不思議なことをなされる」の原意は、「驚きを引き起こす」ということです。それに応じて、ユダヤ人マルチン・ブーバーは「奇跡の概念は、その出発点で永続的な驚きと定義できる」と述べました。

なぜ、私たちの信仰にとって「不思議なこと」（ルカ1:21、2:18）が大切なのかという問いに対し、D.グロスマンは、「（神は）、あなた（人間）よりはるかに大きく、あなたの知力の範囲を超える」存在であるから、と答えています（参照：詩編139:6、ローマ11:33）。私たちが、正しい神信仰に生きようとするとき、神のなされる「不思議」によって「驚かされ続ける」、それ

よって、日々、私たち自身が改革されるのです。

「太陽」の子、サムソンは、異邦人の領域にも主の霊が降っていることを証しし(士師記14:6、15:14)、また、異邦の女を愛し抜きました(参照:マタイ15:21-28「カナンの女の信仰」)。最後の時、サムソンは孤独に苦難を背負い、主の前にへりくだって祈りました(士師記16:21,28)。そして、彼は破滅と死の果てにある安息へと招き入れられました(士師記16:31)。サムソンは、「不思議」なる余韻を残しつつ、闇の底へ没していきました。

幸いなことに、初めからの旧約の系譜を仰ぎ、上よりの数多の驚きに^{あまた}私たちが包まれるとき、その驚きは私たちの魂を、御子、イエス・キリストへと向けさせます(前の段落の下線部参照)。

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれました。…… その名は『不思議、指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられる」(イザヤ書9:5)という詩句は、キリスト預言であり、私たちのクリスマス、キリスト降誕の賛歌です。

新約聖書の時代、神の「不思議」に直撃されたザカリアやサウロ(パウロ)の様子は、「あなたよりはるかに大きい」神の愛と義を如実に物語っています。神の奇しき御業の前に、ザカリアは「口が利けなくなり」(ルカ1:20,22)、また、サウロは「三日間、目が見えず」(使徒言行録9:9)の有り様でした。沈黙、そして、自分以外のものに寄りすぎるしかないという姿勢が、彼らを神への回帰、そして、キリストに対する回心へと導いたのです。

天使ガブリエルはザカリアに、「(あなたの子は)イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる」、そして「準備のできた民を主のために用意する」(ルカ1:16-17)と告げました。神の遠大な計画のうちに、恐れ多くも、ユダの山里の一つの家庭、年老いた夫婦が用いられます。或る家族の子ども誕生の喜びが、神の民全体へと輪を拡げていきます。

ルカ福音書1:11-13——

¹¹ すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。¹² ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。¹³ 天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。」

ザカリアは、主の天使の来臨によって、自分の考え方や生活の基盤が揺さ振られるような「不安」や「恐怖の念」に襲われました。その時、「恐れることはない」との天使のとっさの介入によって、得体の知れない「恐れ」は神への「畏れ」と変えられました。本来、「人はあなた(主)を畏れ敬うのです」(詩編130:4)。

「ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた」には、神の側から一方的に、その救いの計画の

綿密さと広大さが言い表されています。

ザカリアの聖所入場の場面で、彼の「願い」はいっさい表明されていません。しかし、神がそれを聞き入れた（士師記13:9）とは、主イエスが「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」（マタイ6:8）と教えられている通りのことです。

ここで神が聞き入れられた祈りの内容は、二つから成っています。

①「あなたの妻エリサベトは男の子を産む。」ルカ1:13

②「イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。」ルカ1:16

①の長子誕生について言えば、夫婦二人共、「既に年をとっていた」（ルカ1:7）ので、もうとっくにあきらめていた願いであったかもしれません。年老いた信仰の先達者たち、アブラハムとサラ、マノアとその妻の願いを成し遂げられた神は再び、小さな家庭への慈しみをザカリアとエリサベトの夫婦の間にゆき巡らせてくださいました。二人は子どもへの命名において示された通り（ルカ1:60-63）、堅い絆で結ばれていました。

そして、神はその御心において、人の願い求めを、①から②へと大きくしてくださいました。ユダの山里の小さな家庭に誕生する洗礼者ヨハネは、主イエス・キリストによる救いに向けて、「準備のできた民を主のために用意する」（ルカ1:17）というのです。その旧約以来の用意における重大事として、父たちと子らの関係が炙り出されます。

ルカ福音書1:17 天使ガブリエルからザカリアへの御告げ――

「彼（ヨハネ）はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父（＝父たち）の心の子（＝子ら）に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」

※ルカ1:17のギリシャ語本文も、元（旧約引照箇所）のマラキ書3:24のヘブライ語本文も、「父」・「子ども」共に複数形です。

今、「父たちの心」が子どもたちへ振り向けられているでしょうか。ヨハネの挙げた為すべき準備事項の中で、「父たち」が「逆らう者たち」（従わない者たち）と並行になっている点に、私たち自身……実の子どもの親であり教会に集う子どもたちの親である私たち……の懺悔と回心が求められています。今、私たち父親は、主の御心にそって子どもたちを腕に抱いているでしょうか。ルカ福音書1:17の箇所では、信仰者としての「父親像」が問題なのだと言いながら、目の前で泣いている子どもをあやさない父親がいたとしたら、主イエスは何とおっしゃるでしょうか（参照：マルコ7:8-13）。

いったい、「その道筋をまっすぐにせよ」（マタイ3:3）との命令を与えられた洗礼者ヨハネが果たした最も大きな働きは、何なのでしょうか？

それは、その先駆者の道が、主イエス・キリストの十字架の茨いばらの道へと通じているということではないでしょうか。父アブラハムによって体を縛られて祭壇にささげられたイサク（創世記22:1-19）、あっし圧死したサムソン、そして、惨殺されたヨハネの道が……。

不思議と驚きのうちに、ザカリアとエリサベトから誕生したヨハネは、キリストに向けて、十字架と復活を目指して、先駆けの業、準備の働きを果たし終えました。そして、敵対者の罪の闇に取り巻かれるようにして、ヨハネは死を遂げ、世を去りました。一見、ザカリアの家族は不幸のように見えます。しかし、出産前、聖霊がエリサベト・ヨハネの母子に満たされ（ルカ1:15）、そして、父ザカリアもまた聖霊に満たされて預言しました（ルカ1:67）。彼らは聖霊に満たされて、やがて来たるキリストの時代を待ち望んだのです。

マタイ福音書22:32 主イエスの言葉——

「『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。」

独り子を待ち望んだアブラハムから、イサク、ヤコブを経て、マノアへ、そしてマノアからザカリアへと、父と子のつながりの中で、まことの信仰が受け継がれました。そして、彼らの待望は、「生きている者の神」、イエス・キリストの誕生へと至りました。こうして、初めの約束が、ヨセフ・マリアの「独り子」イエスの受肉のうちに、終わりの成就へと至りました。

まさしく、ヨハネ福音書における主の降誕の宣言「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（1:14）の通り、キリストは「わたしたちの間に」、すなわち、この世でいさかひや無関心の虜とりことなっている「わたしたちの間に」入って来られました。

私たちは、「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」（マタイ26:39）と祈り通された主イエス・キリストに寄り頼まねばなりません。なぜなら、父なる神の御心に添い遂げられた主イエス・キリストが、私たちの勝利者であり味方だからです。

私たちが、父なる神の御心を源泉とし、主イエス・キリストのとりなしの祈りにあずかるとき、日常生活の要として、父たちの心が子らに向けられるのです。そして、そのように向け続けられるように、また、「準備のできた」（正確には、神により「準備させられた」ルカ1:17）という信仰者の姿勢が崩されないように、私たちの上に聖霊が注がれます。